

『白虎王の愛婚～誓いの家族～』

著：鳥谷しず

ill：高星麻子

「母上！ わたくしは今朝、とてもいいことを思い出しました！」

胸もとへ飛びこんできた白虎の子を受けとめ、千隼は「どんなことだ？」と笑んで問う。

「名前か？」

「いいえ！ わたくしは、焼きあわびが大好きだったのでございます！」

「.....あわび」

「はい！ わたくしはご飯や野菜はあまり食べられませぬが、焼いたあわびならいくつでも食べられます！」

誇らしげなその報告に、雨邦が「殿下のお膳のあわびも、すべて若宮様がお食べになられました」とつけ加えたところへ、女房がようやく追いついてさらに言った。

「それでも足らぬと仰るので、下女を市にやって、あるだけのあわびを買い占めさせてまいりました」

「今日の昼餉は、あわび盛り盛りのお膳でございます。母上も一緒に食べましょう！」

ああ、と笑って、千隼は持ってきた砂糖菓子に入った木箱を女房に「皆さんは、こちらをどうぞ」と渡す。

受け取った女房は「まあ、ありがとうございます！」とぱっと顔を輝かせた。

「たくさんありますから、使いに行ってくれた方にもわけてやってください」

「かしこまりました。きっと、喜びますわ」

頷いた女房は「では、さっそく」と、厨のあるほうへ向かった。

千隼は、雨邦に先導されて紫凰の居室へ向かう。

「殿下、千隼様がいらっしゃいました」

涼しげな月白色の狩衣を纏い、文机で書を広げていた紫凰が顔を上げ、「ああ」と微笑む。

「暑かったらう。雨邦、千隼に何か冷たいものを頼む」

御意、と応じて、雨邦が部屋を出る。

「好物はあわび、以外にわかったことはありますか？」

白虎の子がやって来た日から、紫凰は千隼の知っている紫凰に戻った。自身の過去や火織子については何も話してくれないが、千隼を「一の宮様」と呼んだり、敬語を使ったりすることはもうしなくなったし、よく笑ってくれるようになった。

紫凰は家司の雨邦には詳しい事情を話しているようで、使用人たちはその雨邦から、白虎の子は紫凰の子かもしれなく、記憶を失っていること、そして千隼は男だけれど半分神子族なので母親だという要点だけを聞いているようだ。そうしたことを、あまり詮索もせず受け入れ、千隼を仰々しく敬ったりしないこの邸の者たちは、獣人だったり、人間だったり、異国人だったりした。雨邦のように貴族の出の者もいれば、捕らえた紫凰に諭されて改心し、押しかけ下男となった元海賊もいる。

親王の住まいなので、もちろん豪華で洗練された邸ではあるものの、そんな使用人たちの醸し出す雑

多な雰囲気は、どこことなく笹椋に似ていた。

とても居心地がよく、初めて訪れたその日に千隼はすっかり馴染んでしまった。

笹椋で夏の暑い日にそうしていたように、円座など敷かずに、ひんやりした板間にそのまま座って胡座をかき、足のあいだに白虎の子を置く。

すると、「残念ながら、ない」と答えた紫凰が、肩を震わせて笑い出した。

「雁鐘山で仙女のような姿で太刀を振り回しはじめたときも驚いたが、その格好、まるで荒くれ武者だな。とても、聖宮になる身とは思えぬ」

優美な笑顔が目に沁みて、千隼は咄嗟にうつむき、白虎の子を撫でる。

「……女官たちにどのような孔雀にしたてられても、俺は、心は常に笹椋警衛十隊の二番隊副帥ですから」

「それほど笹椋が恋しいか？」

「はい、とても……」

理由がわからないまま速くなり、耳の奥でうるさく響く鼓動の音をごまかすように早口で言って、千隼は気持ちよさそうに青い目を細める白虎の子を抱き上げる。

「そなた、あわび以外に頭に浮かんで来ることはないか？」

「ありませぬ！ わたくしの頭の中は、あわびばかりにございます！」

「そうか。だが、それでは少し困るのだ。俺のために、あわび以外のことを何か思い出してくれぬか？」

「わかりました！ 母上のために、頑張ってみます！」

白虎の子は尻尾をぴんと立てて宣言し、目をぎゅっと瞑った。

懸命に頭の中を探っているらしく、しばらく「う～」と唸っていたが、ほどなく尻尾が力なく空に垂れた。

そして、青い目のふちがじわじわと潤んでいった。

「駄目です……。どんなに頑張っても、あわびしか出てきませぬ……」

白虎の子は涙をぽろぽろとこぼし、悲愴な顔で叫んだ。

「やはり、わたくしの頭の中には、あわびしか入っておりませんでした！」

「あ、ああ。わかった。あわびは、とてもよい海の幸だ。頭の中が幸でいっぱいこそなたは、幸せの白虎だ。だから、泣かなくてもよい」

慰めになっているのか、いないのか、自分でもよくわからないことを慌てて言った千隼に、白虎の子はぶんぶん頭を振った。

「いいえ、わたくしは駄目な白虎でございます。あわびのことしか覚えていない上に、母上や父上と同じ姿になることもできませぬ！ もさもさしているだけのこの姿が、恥ずかしゅうございます……」

耳も髭も尾もしょんぼりと垂らして、白虎の子はさめざめと泣く。

「そんなことはない。そんなことはないぞ！」

思い出すことを急かしたせいで、白虎の子を傷つけてしまった。

狼狽えるあまり、自分の犯した大きな失態を償うための言葉が出てこない。

「すまぬ、そんなに泣くな。目が溶けてしまうぞ」

ふえっ、ふえっとしゃくり上げる白虎の子を撫でようとしたが、ふいにその姿が腕の中から上空へと離れていった。

見ると、立ち上がった紫凰が白虎の子の首根っこを掴んでいた。

「そなた、その姿が恥ずかしいのか？」

「……だって、わたくしのように、ずっと毛の塊の姿でいる者などおりませぬゆえ」

白虎の子がだらんと身体を垂らして呟いたとき、雨邦が氷入りの茶を運んできた。

「ちょうどよい、雨邦。今、手が空いている者を皆、集めよ」

「皆、でございますか？」

「そうだ」

千隼の前に茶を置いた雨邦は一瞬、不思議な顔をしたものの、すぐに「御意」と踵を返す。

白虎の子を持った紫凰もそのまま部屋を後にして、前の簀子へ出る。そして、白虎の子を下ろすなり、獣姿に変じた。

紫凰がいきなり晒した本性を、白虎の子は目を丸くして見上げる。同じ白虎でも、自分とは到底比べものにならない大きさに驚いたのか、涙が引っこんだ様子だ。

「……父上は、白虎のお姿になるととても大きいのですね！」

白虎の子が興奮気味の声を高く響かせたところへ、男女の僕従たちが方々から現れた。それからわずかのあいだに、紫凰と白虎の子が並ぶ簀子の前の庭には黒山の人だかりができた。

女房たちも夏の強い日射しを避け、はす向かいの廂に集まっている。

「おやおや。宮様の獣姿は相変わらず、立派だねえ。思わず拝みたくなるよ」

庭先で下男姿の狸の耳の翁が言うと、隣に立っていた人間の若者が「俺は、殿下のあの丸太みたいなぶっとい前肢の一撃で、船から海へ吹っ飛ばされたことがあるんだぜ。いやあ、あのときは死ぬかと思っただぜ」と陽気に笑う。

「あんた、一体、何度同じ話をすりゃ、気がすむんだい？」

「大体、自分がお尋ね者の海賊だったって話を、よくもまあ、そんなに自慢げに口にできるもんだねえ」

「殿下に海へ吹っ飛ばされて、頭の中の大事な脳を海に落っことしてきたんじゃないのか？」

庭の下男、下女たちが、「違いない」とどっと笑う。

「殿下。皆、集まりましてございます」

戻ってきた雨邦が、紫凰の脇に控えて告げる。

紫凰は頷いて、一步前へ出る。降りそそぐ陽の光を浴び、美しい縞模様を浮かべる真っ白の被毛が眩しい煌めきを強く放つ。

「そなたたち、私のこの姿はどう見えるか申してみよ」

「そりゃ、決まってる！ この上なく立派だぜ、殿下！」

元海賊の若者が真っ先に叫ぶと、皆が口々に紫凰を褒め称えはじめる。

「巖のごとき逞しさに、感服いたしまする」

「私は、白く輝くそのお姿の神々しさに、まこと惚れ惚れいたしまする」

「白虎帝もかくやの、ありがたいばかりの輝かしさにございます！」

主人の獣姿を盛んに囃す下男や下女は、役者が立つ舞台に喝采を送る客のようだった。

時々、荒っぽい言葉も混じるが、紫凰への敬意がはっきりと感じられる声に、千隼は何だか楽しくなる。

称賛の嵐の中で、白虎の子も気分がよくなったようだ。誰かが何かを言うたびにぴょんぴょん跳ねる白虎の子を、紫凰が「若宮よ」と呼ぶ。

「はい、父上！」

高く跳ねながら、白虎の子が元気な返事をする。

「そなたの姿は私と同じ。それでも、恥ずかしいか？」

問われた白虎の子は紫凰の周りをぐるぐる回り、その姿と自分とを見比べる。そして、はち切れそうな笑顔で言った。

「いいえ、父上！」

「ならば、よい。もう、めそめそ泣いて、母上を困らせるでないぞ」

—母上。

自分をそう呼んだ紫凰の言葉が、耳の奥で甘やかに響く。

単に白虎の子の口癖が移っただけで、それ以上の意味はない。そうわかっている、白虎の子だけでなく、自分へも向けてくれた思いやりが嬉しくて、胸がじんわり熱くなる。

「はい、父上！」

「若宮よ。私がそなたの父かどうかは、まだわからぬ。そう申したであろう。忘れたのか？」

「忘れてはおりませぬ、父上！」

紫凰はため息をつきつつも、再度の訂正はしなかった。不本意ながらも「父上」と呼ばれることを甘受したらしい。

「母上！ わたくしも、父上のように白く輝いておりますか？」

紫凰の優しさも、白虎の子の素直さも微笑ましく、「ああ、ぴかぴかだ」と千隼が笑んだとき、紫凰がふと雨邦に尋ねた。

「雨邦。壺花の隣におる娘は初めて見る顔だが、いつからこの邸におるのだ？」

「殿下が群行の護衛のお勤めに出ておられるあいだに、新しく下働きとして雇いました。以前は主馬首様のお屋敷で働いていた者で、名は小鞠と申します」

「ああ。主馬首の邸は盗賊に押し入られたのであったな」

「はい。家財のほとんどを奪われたそうで、それで暇を出されたと」

「そうか。ならば、我が邸では大事に使うてやれ」

そのやわらかな言葉に雨邦が双眸を細め、「御意」と頷いた。

本当に優しい皇子だと思った胸の中で、心臓が大きく脈を打った。

翌日は夕刻近くに紫凰の邸を訪れた。出迎えてくれた雨邦によると、紫凰は昨日からずっと獣姿のまま白虎の子の相手をしているらしい。今も、一緒に庭へ出ているそうだ。

千隼は散策がてら、ひとりで紫凰と白虎の子を探すことにした。

よく手入れされた趣味のよい緑の中で、蝸の鳴き声が響いている。夏を閉じこめたような庭をしばらく歩いていると、「母上！」と呼ばれた。

夏椿の木のそばで、白虎の子が紫凰に跨がって尻尾を振っていた。

ふたりのもとへ、千隼は駆ける。

「父上、わたくしの当たりでございます！」

小さな尻尾をさらに大きく振る白虎の子に、紫凰が「そうだな」と返す。

「何が当たったんだ？」

紫凰の背から自分を嬉しげに見上げてくる白虎の子の頭を撫で、千隼は問う。

「匂いです。わたくしは、母上の匂いがするので、母上がいらっしゃったと申したのです。でも、父上はおわかりにならず、べつの匂いだろうと仰ったのです」

「そうか。そなたの鼻は、よくきくのだな」

千隼は微笑む。すると、紫凰が「私の鼻は、べつに悪いわけではないぞ」と千隼を一瞥して言った。

「母と子の絆ゆえの、特別に鋭い嗅覚がこの者には備わっているようだ。何しろ、常蓮の池に飛びこんだ際、そなたの匂いを探して、そなたを見つけたというからな」

「そうなのです！ 母上に会いたいと念じながら、母上の匂いを探したのです」

すぐに見つけられました、と白虎の子は得意げに告げる。

「それは、すごいな」

自分の匂いを手がかりに時空を渡ってきた白虎の子は、やはり本当に自分の子――。

確信が深くなる胸の中で、白虎の子を愛おしく思う気持ちも強くなってゆくのを感じていたときだった。

白虎の子がふと伸び上がり、鼻をひくひくと蠢かしたかと思うと、「ああ！」と叫んだ。

「あわびを焼いている匂いがいたします。今日の夕餉も、あわびのようでございます！」

千隼も空気を嗅いでみたけれど、夏の緑の匂いしか感じられなかった。

「殿下はわかりますか、あわびの匂い」

「ああ。厨はここから近いゆえ、これはわかる」

頷いた紫凰の背で、白虎の子は興奮気味に腰をぽんぽんと跳ね上げている。

当然のことながら、紫凰には手綱や鞍などついていない。あまりはしゃぐと落ちてしまうのではないかと心配し、注意しようとしたときだった。

跳ねていた小さな腰が、紫凰の背からすると横へすべる。

「――あっ」

千隼は声を漏らし、咄嗟に受けとめようとした。だが、それより先に、太くて長い尾が白虎の子の身体に巻きつき、もとの位置へ引き戻す。

「どうも落ち着きがないの、そなたは。そこでは、じっとしておれと申したであろう」

「はい、父上」

「落ちたら、危ない。気をつけるんだぞ」

「はい、母上」

素直にそう返事をしながらも、白虎の子は「うふっ、あわび！ うふっ」とまた跳ねながら尻尾をく

るんくるんと揺らしている。

こちらの心配をよそに、あまり懲りたふうもない様子に、千隼は微苦笑を漏らす。

「そう言えば、若宮よ」

「はい、父上」

「そなた、昨日、壺花にちゃんと礼を申したか？」

「お礼？ なぜですか？」

「壺花は厨での仕事を多く抱えておる。その手をとめて、そなたのために、遠い市まであわびを買いに行ったのだぞ」

「でも、わたくしは若宮様でございます」

名前のわからない白虎の子は、この邸の中では「若宮様」と呼ばれている。

もっとも、白虎の子は、その呼び名に「幼い皇子」という意味が込められていることは知らないようだった。けれども、それが自分につけられた愛称だということと、自分が「父上」である紫凰の次に敬われる存在だということは、ちゃんと理解しているらしかった。

だからだろう。白虎の子は、下女に礼を言ったかと確認されたことがとても不思議らしく、大きな青い目をぱちぱちとしばたたかせた。

「心得違いをしてはならぬぞ、若宮。そなたが何の不自由もなく暮らせるのは、使用人たちのおかげだ。あの者たちがいなければ、そなたは自分で市へあわびを買いに行き、自分で竈の火をおこし、あわびを焼かねばならぬのだぞ。それが、そなたにできるか？」

「.....できませぬ」

「ならば、そなたの代わりにそうしてくれる者たちに、きちんと感謝をせねばならぬ。わかるな？」

「はい、父上！ わたくしは、ちゃんとあわびのお礼を言います！」

すぐさまそう返事をした白虎の子を、千隼は「偉いぞ」と撫でる。我が子の、そのまっすぐな心根を誇らしく感じながら。

そして、同時に思った。

白虎の子を危険から守り、過ちを諭す紫凰は、まるで父親のようだ、と。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>